

鹿児島における若年層の生活文化調査 (第1報) プレ調査結果

西 迫 貴美代・坂 上 ちえ子

Investigation of the Life and Culture of the Youth in Kagoshima (1)

The Report of a Preliminary Investigation

Kimiyo NISIZAKO and Chieko SAKAGAMI

A pre-investigation was carried out for the purposes of survey regarding the attitude/condition of our students and preparation of future investigation for youth generation in Kagoshima. The results from this pre-investigation suggest the following points:

1. Students surveyed by this pre-investigation indicate that they are satisfied with current style of life and maintain good/calm relationship with their families and friends.
2. On the contrary, they recognize for themselves that they are not independent from their parents and are not adult due to normative attitude given by their parents. New sociability except parent-child relationship is made by part-time work and other factors.
3. Common attitude against present culture are not so strong. No fellow feelings to certain subculture by youth generation were recognized.
4. Their steady attitude with regard to consumption behavior, work and savings are recognized.
5. Additional questioners regarding cause and reason for their attitude and behavior may be needed in the future investigation. Unified theme included in questioners against various areas may be also needed. And it is indispensable to investigate their change in mind, region and their historical background by applying both the longitudinal method and the cross-sectional method.

1. はじめに

昨今、少年犯罪が続出し、10代の若者に対するネガティブな「イメージ」は増幅するばかりである。しかし、その「イメージ」とは若者に対して連想する大人の「観念」に過ぎず、若者の実態そのものではない。われわれ短期大学に勤務するものとしては、喧伝される若者像に惑わされることなく、日々接している一番身近な若者の意識や行動実態、その変容、さらに背景にある社会構造を把握することが必要である。しかし、人の心情や行動を客観的に捉えることは容易ではない。本研究においては、一般的な方法である質問紙法を用い、できるだけ具体的な数値を手がかりにその実態を浮き彫りにしたい。そのためには可能な限り若者の実態に近づくよう、質問項目内容を精査、

焦点化しなければならない。そこで今回、本学学生の生活全般に関わる意識と実態を把握すること、また今後実施予定の鹿児島における若年層調査の項目作成及び、調査に資する知見を得ることを目的にプレ調査を行った。

2. 研究方法

(1) 調査方法

調査は平成11年4月に入学した鹿児島県立短期大学第1部1年生を対象として、留置き法自記式による質問紙調査を実施した。調査時期は1999年12月である。配布数は195票で、回収率67%、有効回答率は100%であった。専攻別の回収状況は以下に示す通りである。日本語日本文学専攻(日文)77%、英語英文学専攻(英文)63%、食物栄養専攻(食栄)83%、生活科学専攻(生活)50%、経済専攻(経済)69%、経営情報専攻(経情)63%。回答結果については単純集計及びクロス集計によって分析を試みた。

(2) 調査内容

調査者の属性等を知るためのフェイスシートとして、所属学科、性別、出身地、居住形態、1ヶ月の小遣い額、1ヶ月のアルバイト額、父親の年齢、母親の年齢を選定した。

調査内容は今後行う本調査項目作成の参考とするために、後掲の先行調査も踏まえながらできるだけ広い範囲となるよう考慮した。それらを「Ⅰ. 生活」、「Ⅱ. 文化」、「Ⅲ. 消費」に大別し、それぞれについてさらに詳細な項目を設定し、意識及び実態を調査した。「Ⅰ. 生活」での具体的な内容は、生活スタイル・生活面での満足感・価値・将来・家事労働・親子関係・健康・身体・心身の状態・友人関係・大学生活・学業・アルバイトの種類・アルバイトの目的・アルバイトの功罪・自己評価・自己像・自己像根拠・対人関係である。「Ⅱ. 文化」ではテレビ聴取状況・読書・遊び・ファッション・おしゃれ・占い・文化動機・同化意識・スポーツで、「Ⅲ. 消費」では所有物、購入判断基準、被服行動、労働観、就職、貯蓄、金銭感覚、クレジットカードに対する意識を調査項目とした。

3. 結果及び考察

(1) 対象者属性と概要

フェイスシートにより得た対象者の属性と概要は図1-1～図1-8に示す通りである。有効回答を得た対象者の性別は131名全員が女性である。出身地は鹿児島市内と市外がそれぞれ45.0%、45.8%とほぼ同数である。親と同居している対象者は70.2%で、他大学調査¹⁾に比較して多い。1ヶ月の小遣い額は、親からももらっていない者が30.5%と最も多く、20,000円までの者で約8割を占める。1ヶ月のアルバイト料は0円が28.2%と最も多いが、40,000～50,000円が13.0%、50,000～60,000円が4.6%と高額収入を得ている者も多い。父親の年齢は41～45歳が12.2%、46～50歳が51.9%、51～60歳が19.1%と正規分布を示したが、母親の年齢は41～45歳が38.2%、46～50歳が45.8%と40歳台に集中した。

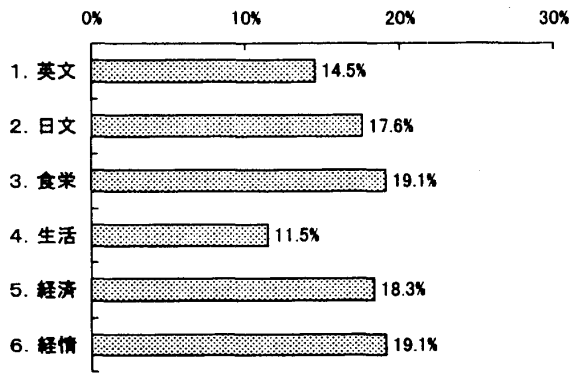


図1-1 所属学科

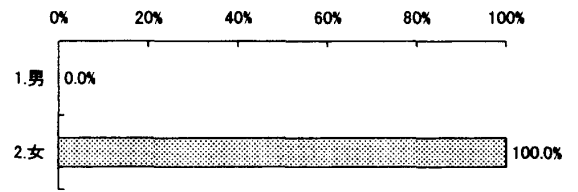


図1-2 性別

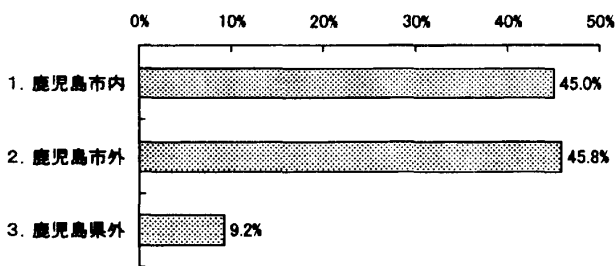


図1-3 出身地

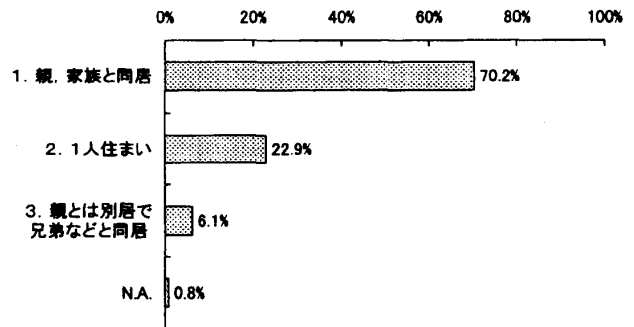


図1-4 住居

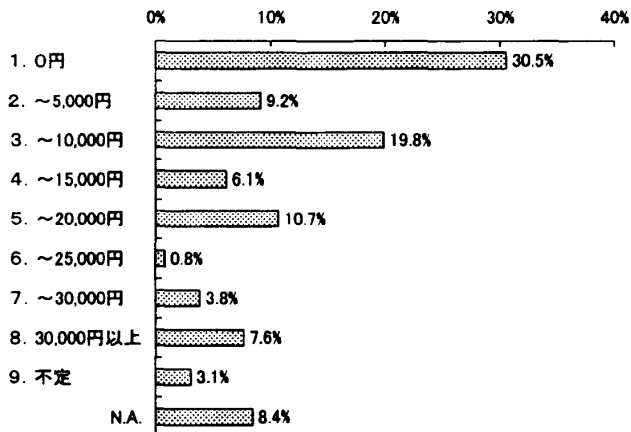


図1-5 1ヶ月の小遣い額

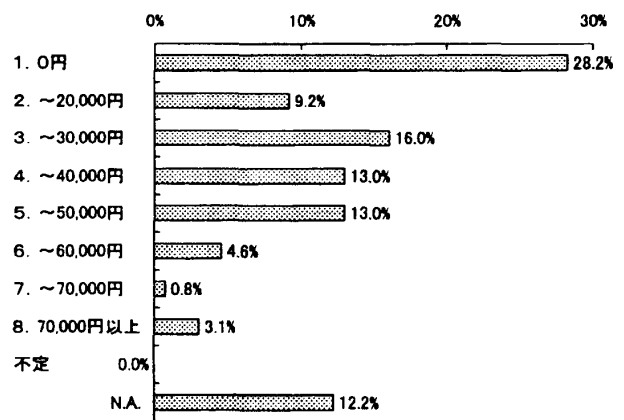


図1-6 1ヶ月のアルバイト料

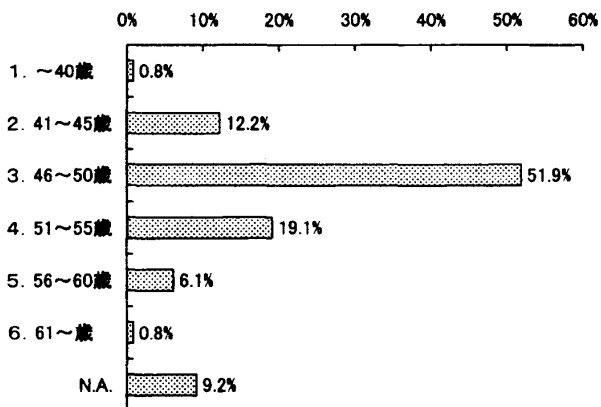


図1-7 父親年齢

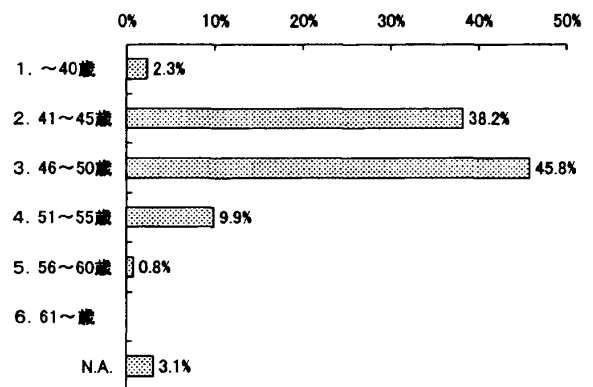


図1-8 母親年齢

フェイスシート8項目についてそれぞれクロス集計を試みた結果、得られた特徴は以下の通りである。英文，食栄専攻は県外出身者（平均：9%，英文：21%，食栄：20%）が，また，生活，経情専攻は鹿児島市内出身者（平均：45%，生活，経情：60%）が平均を上回っていた。また，食栄専攻は1人住まい（平均：23%，食栄：48%）が他の専攻より多く，英文専攻は父親，母親ともに若いことがわかった。

(2) 「1.生活」について

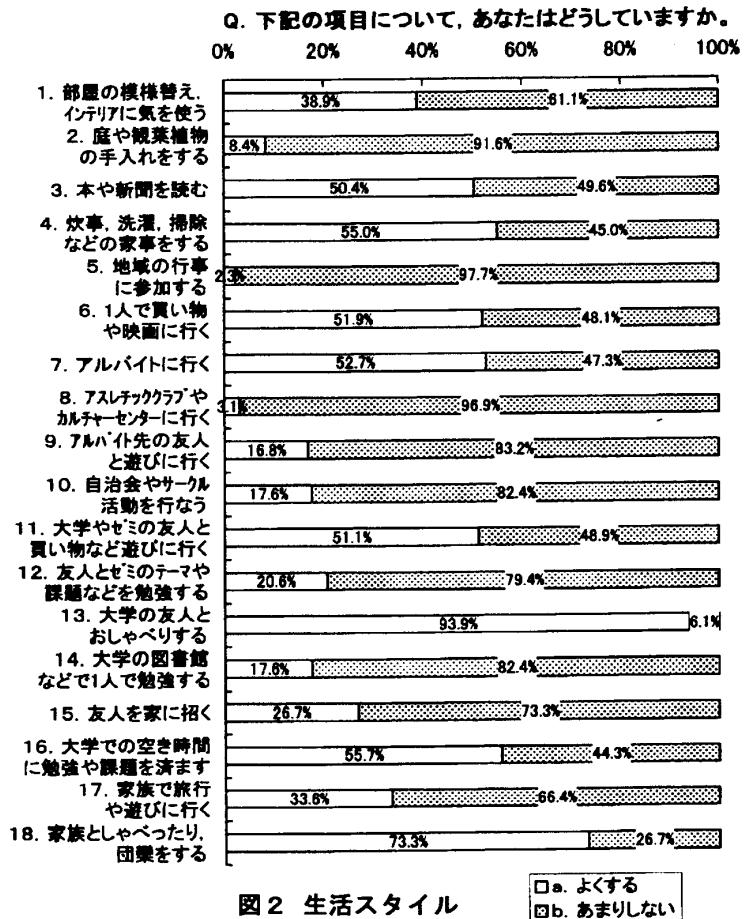
1) 生活スタイル

本学学生と接するのは学校内に限られ、彼らの学校外での生活を知ることは少ない。日常生活，余暇の過ごし方，大学生活など対象者の生活スタイルを把握するために、既往研究²⁾を参考に生活行動項目を設定した。その結果を図2に示す。「あまりしない」と回答した者が多い項目は「5.地域の行事に参加する」(97.7%)「8.アスレチッククラブやカルチャーセンターに行く」(96.9%)「9.アルバイト先の友人と遊びに行く」(83.2%)「10.自治会やサークル活動を行う」(82.4%)「14.大学の図書館などで1人で勉強する」(82.4%)であった。反対に「よくする」に多く回答を得た項目は「13.大学の友人とおしゃべりをする」(93.9%)「18.家族としゃべったり，団欒をする」(73.3%)であった。クロス集計結果を見ると日文専攻は読書をよくする割合が高い

(78.3%)。また，県外出身者は友人と買い物などに行く(75%)，友人と勉強する(50%)者が多いことがわかった。結果をまとめると，地域や社会に積極的に出て過ごす，あるいは逆に，個人の範囲に閉じこもる生活スタイルをとる者は少なかった。家族や友人との静かな交流をベースとする生活行動に調査対象者の特徴が見られる。

2) 生活に対する満足感

生活全般への意識を俯瞰するために，生活における物質面，心の面，環境面，対人面の4つに対する満足感を尋ねた結果を図3に示す。「1.物質面」「3.環境面」「4.対人面」では，「やや不満」「不満」を合わせても15%に達せず，「満足」「やや満足」を合わせると60%を越えた。それに対し「2.学業，趣味，生きる目標などの心の面」には，満足している者，どちらでもない者，不満な者がほぼ1/3ずつに分かれた。クロス集計結果では，県外出身者に心の面，対人面いずれも満足と回答した者が多かった。衣・食・住などの物質面と，安全，快適さといった環境面に対して満足度が高



いことは、他の調査結果³⁾でも明らかにされており、日本全体の豊かさを反映していると考えられる。また、友人関係、親子関係への満足感は、(2)-1)「生活スタイル」で明らかになった、家族や友人との関係を重視する対象者の生活行動を背景とした結果と考えられる。心の面における回答のバラつきは、

現在と将来に対する不安に敏感な若年層の普遍的特徴にもとづいていると解釈できる。

3) 価値 (大切にしていること)

現在、1番大切にしていることを図4に示す。

上位を「1. 自分」(29.0%)「2. 家族」(22.1%)「3. 友人」(15.3%)が占めた。車やお金などの物質、あるいは宗教やボランティアなどの活動より、自分を含めた身近な人間関係に重きを置いている価値観が浮かび上がってきた。

4) 将来

人が生きる現在とは過去と未来との相互関係の中で成り立つ。現在をより深く知るために、予想する10年後を質問した回答結果を図5に示す。「1. おおよその将来が想像でき、明るいような気がする」(10.7%)「2. 将来のことは想像できないが、なんとなく明るいような気がする」(44.3%)と将来に明るさを感じている者が過半数いた。とくに心の面で満足している者の45%、県外出身者の33%が「おおよその将来が想像でき、明るいような気がする」と予想していることがクロス集計でわかった。それに対し、暗いと予想する者は合わせて全体の15%程度しかいない。

(2)-2)「生活に対する満足感」で明らかになったように、満足する面が多い現在の生活が将来に対する予想に相関した結果だと思われる。一

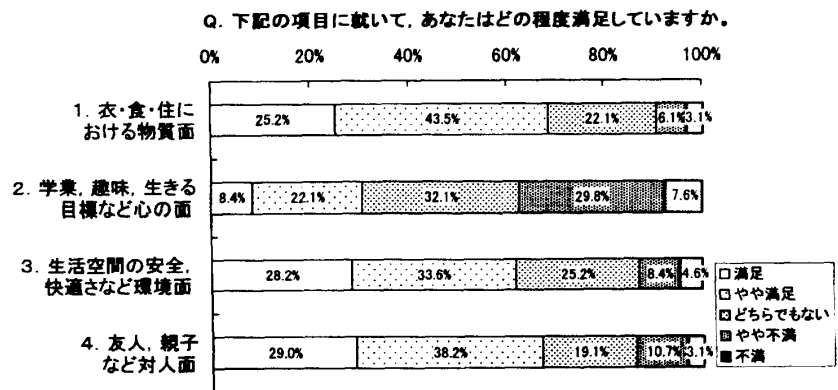


図3 満足感

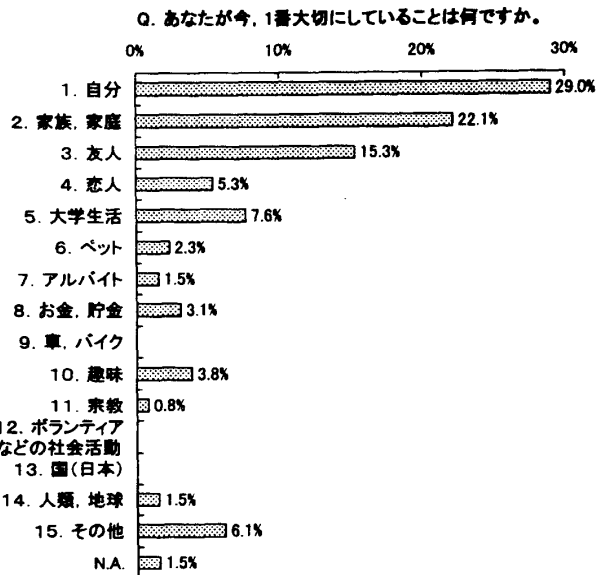


図4 価値(大切にしていること)

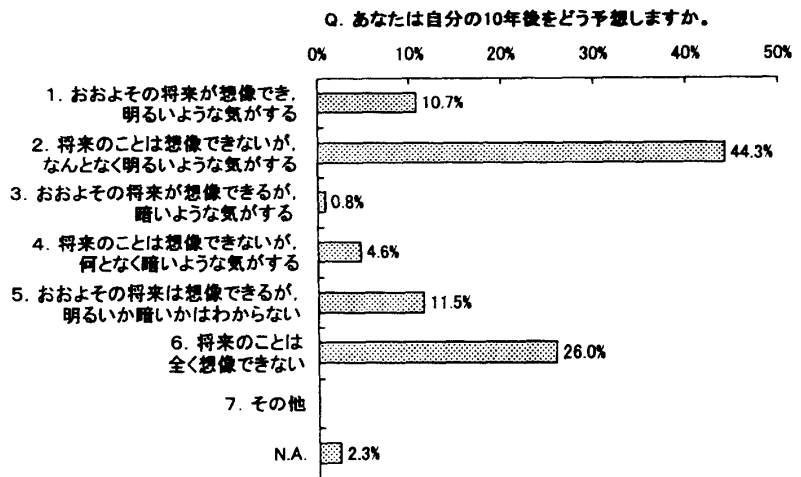


図5 将来

方、「6. 将来のことは全く想像できない」と回答している者も26.0%おり、現在だけを優先し、中高年のようにライフスケジュールを立て、時間的見通しの中で現在を生きるに至らない若年層の特徴を表している。

5) 家事労働

日常生活に欠かせない家事労働への参加についての結果を図6に示す。「5. 家族と一緒に暮らしているので、全てまかせている」と全く家事労働をしないと回答したのは11.5%であった。それに対して、分量は様々であったが8割以上が家事労働を行なっている結果が出た。他の調査によると小学生では4割近くが全く手伝いをしないと答え⁴⁾、母親が手伝いをさせないことがその理由であった。日本では女性だけに家事が期待される傾向があり、回答者が全員女性であることがこの結果に影響していると思われるが、家事労働に参加し生活感を育み、家族員の責任を果たしているとも考えられる。

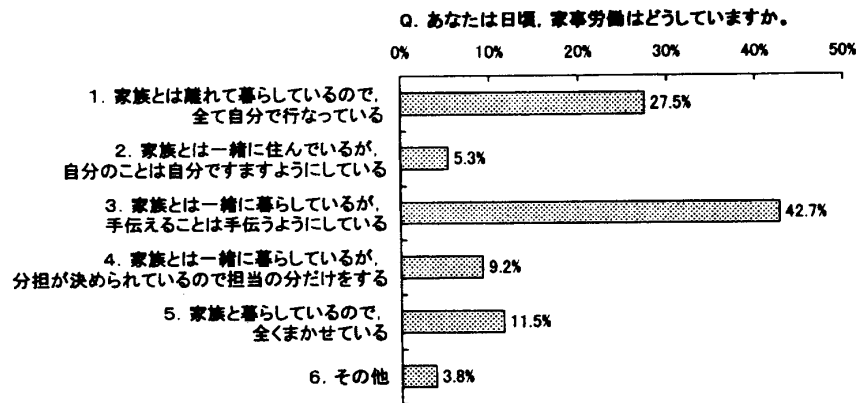


図6 家事労働

6) 親子関係

10代の若者を知る上で親子関係は重要な要素となる。図7-1～7-2に親子で話すことと、親から言われたことについての結果を示し、これらから調査対象者の特性を探る。図7-1の親子の話題では「4. 異性関係に関すること」については「あまりしない」「全くしない」合わせて74.4%の結果を得たほかは、学校生活、健康、友人関係、日常生活、家庭外の生活、社会問題、芸能など全般に渡って親子で話をしていことがわかる。これは(2)-1)「生活スタイル」で把握した家族との団欒を重視した生活行動、(2)-2)「生活に対する満足感」の結果で得られた家族を含めた対人関係への満足感、(2)-5)「家事労働」参加、という一連の傾向につながる結果だと考えられる。

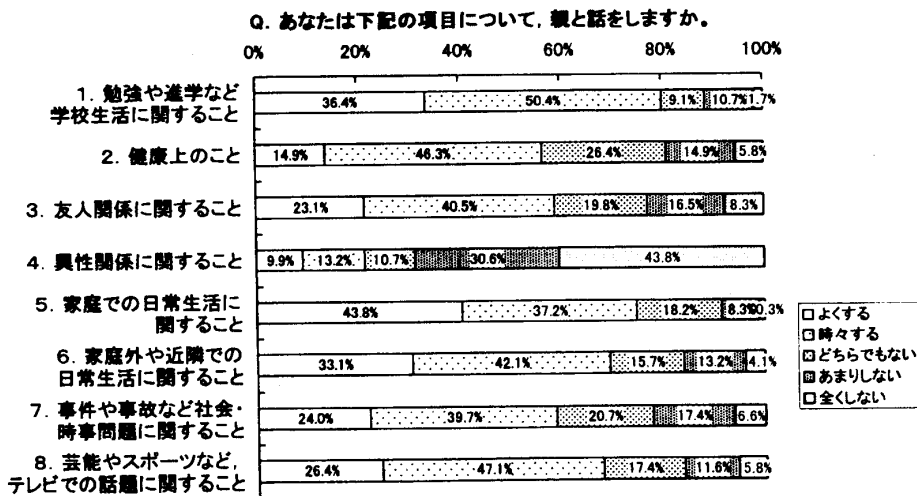


図7-1 親子の対話

が安定していることがわかる反面、家族という「枠」に納まる調査対象者の特徴が浮かび上がる。しかし、これは今回の調査対象者が1年生であることから、家庭から一步を踏み出す「手前の状態」であるとも解釈できる。今後、就職活動やアルバイトによってどのように変容するのか、縦断的手法により追跡調査を試みたい。

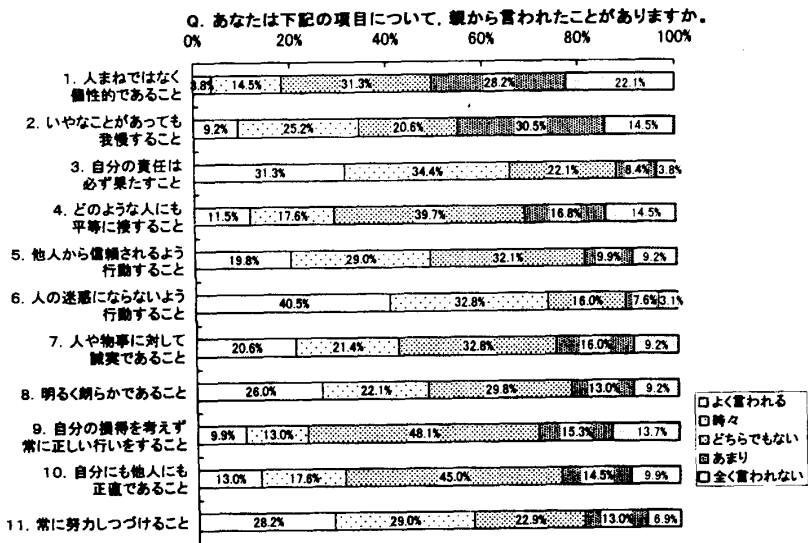


図7-2 親から言われること

えげずに常に正しい行いをする」「10. 自分にも他人にも正直であること」は「言われる言われないうのどちらでもない」と曖昧な回答が多かった。挙げた11項目の中で「1. 個性的であること」「2. 我慢すること」の2項目で「あまり言われないう」という結果が見られた。時代背景や対象者の年齢を考え、親からの言語による規範伝達は少ないと予想していたが、今回の調査結果からはそのような傾向は見られない。調査対象者は親から「あるべき姿」を言われ続けていることがわかった。また、その「あるべき姿」の内容には特徴が見られる。アメリカの高校生に対する調査⁵⁾では、「個性的であること」「正直であること」を親からよく言われるという結果が出ている。これら2つは場合によって家庭内に対立葛藤を生むことが考えられるが、アメリカの親子関係はそれを避けない。一方、今回の結果からは対象者の親子関係に「責任を果たす」「迷惑を掛けない」「努力を続ける」ことを要求される日本社会の縮図を見ることが出来る。

7) 健康

加齢とともに病気や自分の体へ関心が増すといわれるが、若者はどうなのだろうか。健康に関する項目の回答結果は図8に示す。健康には「気を使っている」「まあ使っている」者を合わせて82.4%と多かった。しかし、健康保持のために何かしているか、できるだけ体を動かすようにしているか、栄養のバランスに気をつけているかを尋ねた結果は同じ傾向が見られ、約6割が「している」、約3割が「していない」と答えた。健康に関する意識と行動

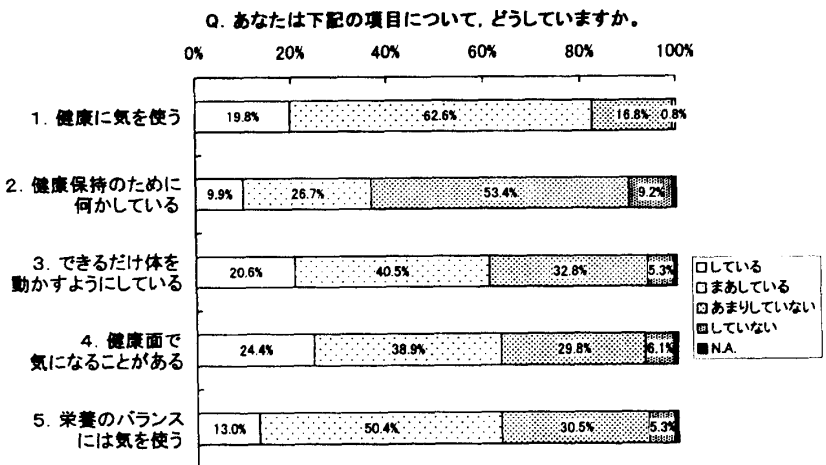


図8 健康

は中高年層と大差ないように思われる。つまり、健康は気にしているが、健康に関する実際の行動は積極的なものではなく、食事や軽い運動というような簡単に行なえることに限られていることが伺える。

8) 身体に対する意識と心身の状態

さらに、自分の体に対する認識結果を図9に示す。「5.その他」に書かれた内容も表現は異なるが「やせたい」が含まれており、8割以上が自分は太っていると認識し、やせたいと考えている結果を得た。メディアによって植え付けられたのか、痩身イデオロギーに縛られる調査対象者の姿が浮き

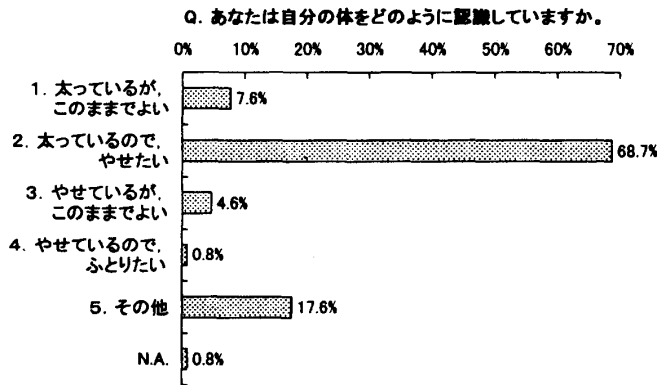


図9 身体に対する意識

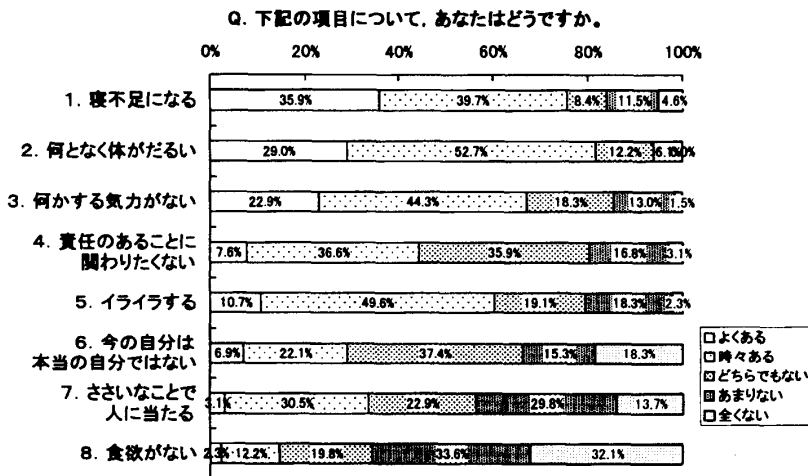


図10 心身の状態

彫りになった。また、心身の状態に対する調査結果は図10の通りである。

「1.寝不足になる」「2.何となく体がだるい」「3.何かする気力がない」「5.イライラする」は「よくある」「時々ある」を合わせると6割以上になる。「4.責任あることには関わりたくない」は「どちらでもない」が35.9%を示しているが「時々ある」も36.6%と多い。「6.今の自分は本当の自分ではない」「7.ささいなことで人に当たる」の2項目は「よくある」「全くない」と答えた者は少なく、「時々ある」「どちらでもない」「あまりない」にほぼ均等に回答が分かれた。「8.食欲がない」だけが「あまりない」「全くない」を合わせて6割以上となり不定愁訴が少ない。高校生を対象とした同様の調査結果でも同じ傾向が言われている。病名を特定できるような症状や食欲低下ではなく、具体的な

原因は見当たらないが完全な健康状態ではないと感じている者が多くいることが今回の結果により明らかになった。

9) 友人関係

他の若者調査でも焦点が当てられる友人及び友人関係に関する結果は図11-1~11-3に示す。親友と呼べる人がいるかと尋ねた結果、「1.たくさんいる」「2.少ないがいる」と回答したものを合わせて86.2%を示した(図11-1)。クロス集計結果を見ると、年齢の高い56~60歳の父親を持つ対象者では100%がその結果を示した。ここまでの今回の調査結果でも友人関係重視の特徴が明らかになされたが、この結果からもその傾向が確認できる。しかも、「3.親友はいないが友人はたくさんいる」

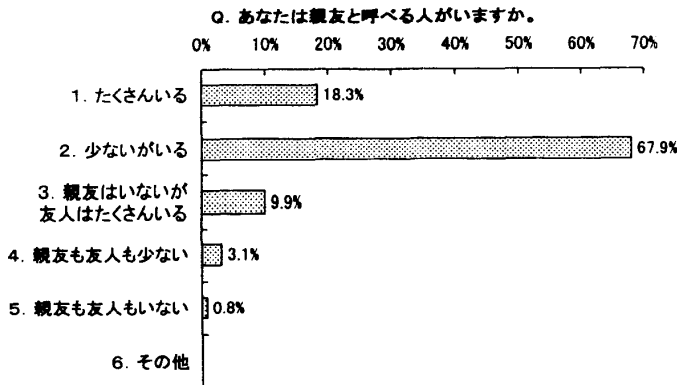


図11-1 親友

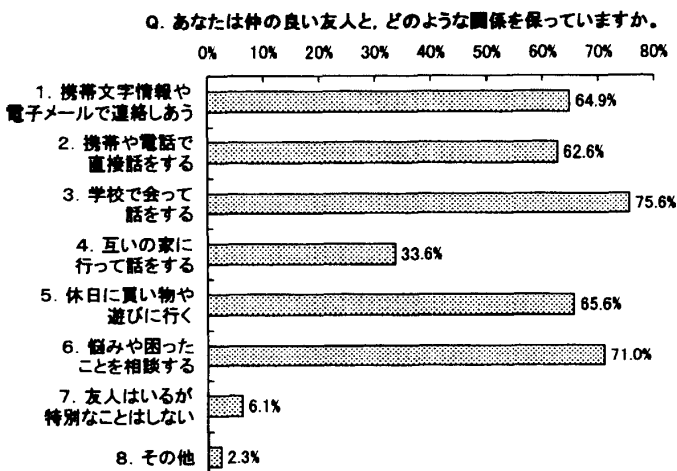


図11-2 友人関係の実態(複数回答)

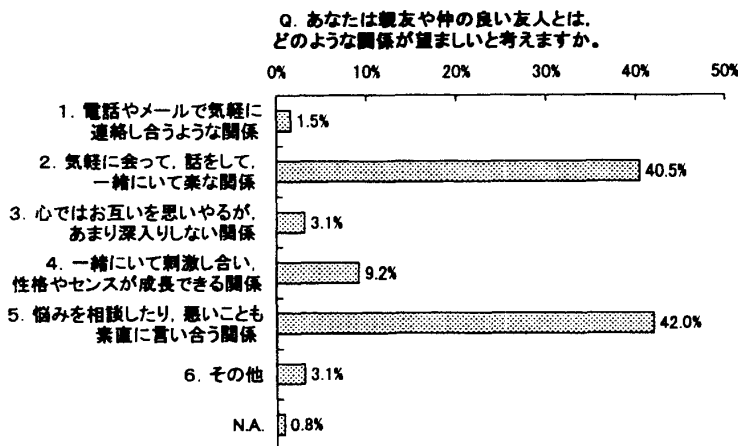


図11-3 望ましい友人関係

者が約10%しかいないことから、大勢の友人より少しの親友でよいと考えていることが推察される。それは親友に高い価値を置いているためなのか、友人が増えることで起こる煩雑な人間関係の処理を厭う心情からなのか、回答の根拠を問う設問が今後必要であると考えられる。

また、現在の友人関係の実態を複数で回答した結果(図11-2)を見ると「4. 互いの家に行き行って話をする」が33.6%と低かった以外は設定した項目全てにおいて6割以上を示し、友好的な関係を保っている実態がわかる。さらに、望ましいと考える友人関係として「2. 気軽に会って、話をして、一緒にいて楽な関係」(40.5%)「5. 悩みを相談したり、悪いことも素直に言い合う関係」(42.0%)の2項目で数値が高かった(図11-3)。望ましいと考える友人関係については軽い関係と深い関係を望む2派に分かれていることが分かる。

10) 大学生活と学業

大学生活に対する満足度と大学で得たいことを尋ねた結果は図12-1～12-2の通りである。図12-1を見ると「1. 大学の講義、実習などの学業全般について」「3. 大学の施設面について」は「満足」「不満足」の者が少なく、「どちらでもない」を中心に、「やや」「満足」「不満足」を感じている。それに対し「2. 大学での友人関係、対人関係について」「4. 県短生であることについて」は不満を持つものが少なく、6割近くが「満足」か「やや満足」していた。これまでの結果からも伺えた人間関係志向が大学生

活に対する意識にも特徴づけられた。また、大学における学業で1番得たいことは、1位「2. 幅広い知識や教養」(42.7%)、2位「5. 実社会ですぐに役に立つ技術や知識」(22.9%)、3位「7. 資格取得のための知識」(9.9%)であった(図12-2)。これまでの本学生への調査結果でも実学習得への期待が見られたが、本調査でも確認できた。高校までの教育にはない、批判力や自己主張力の養成が

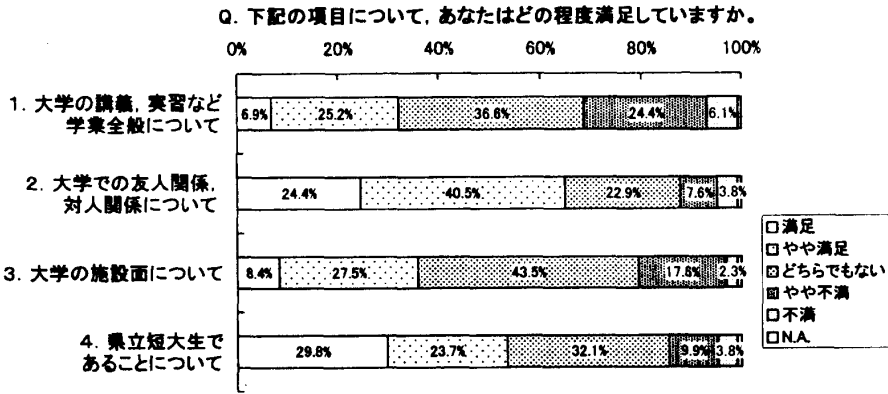


図12-1 大学生生活

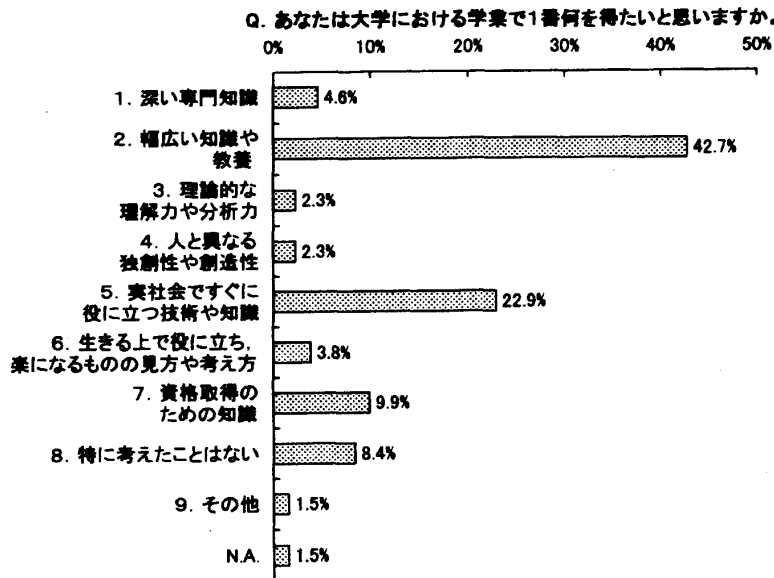


図12-2 学業

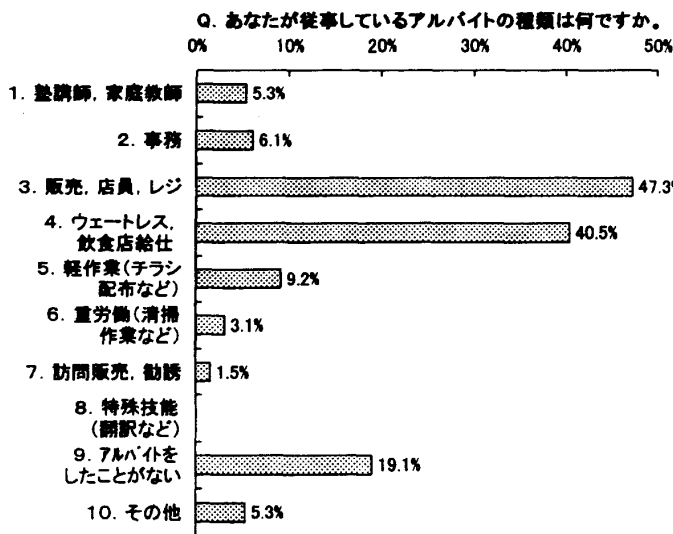


図13-1 アルバイトの種類(複数回答)

大学教育に求められていると仮説を立てていたが、今回その期待は見られない。この点については、横断的手法による他の大学への調査結果との比較を試みたい。

11) アルバイトの種類、目的、功罪

鹿児島県では多くの場合高校卒業後アルバイトを始める。従事しているアルバイトの種類、その目的と功罪についての結果を図13-1~13-3に示す。対象者131名のうち25名は調査時点までアルバイトの経験がなかった。アルバイト経験がある者へこれまでの職種を複数回答で尋ねると「3. 販売、店員、レジ」(47.3%) 「4. ウェートレス、飲食店給仕」(40.5%)の2つに集中した(図13-1)。そのアルバイトの目的は、1位が「1. 服や欲しいものを購入するため」(32.1%)で、以下「2. 外食や普段の小遣いのため」(14.5%) 「3. 生活費補充のため」(11.5%) 「4. 社会勉強のため」(10.7%)と続く(図13-2)。親と同居している者が対象者の7割を越えていたが、このことが約2割の対象者にアルバイトの経験がないことと、生活の維持より生活の充実を上位目的に挙げた結果に影響していると思われる。また、アルバイトはプラスだったか、マイ

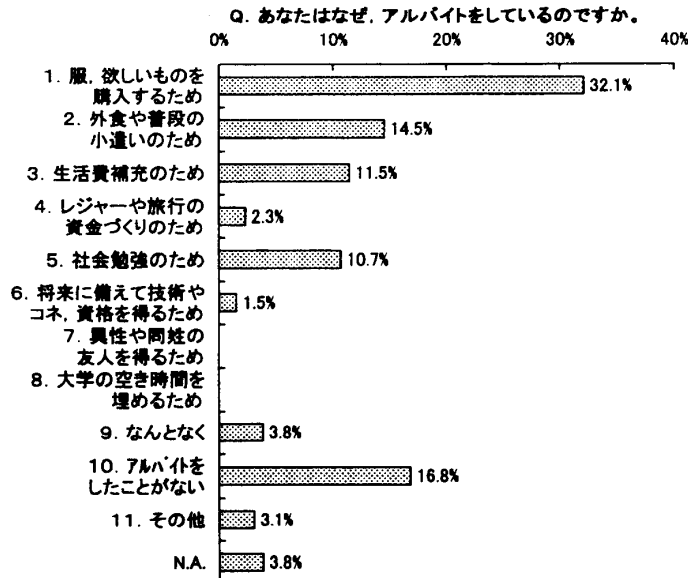


図13-2 アルバイトの目的

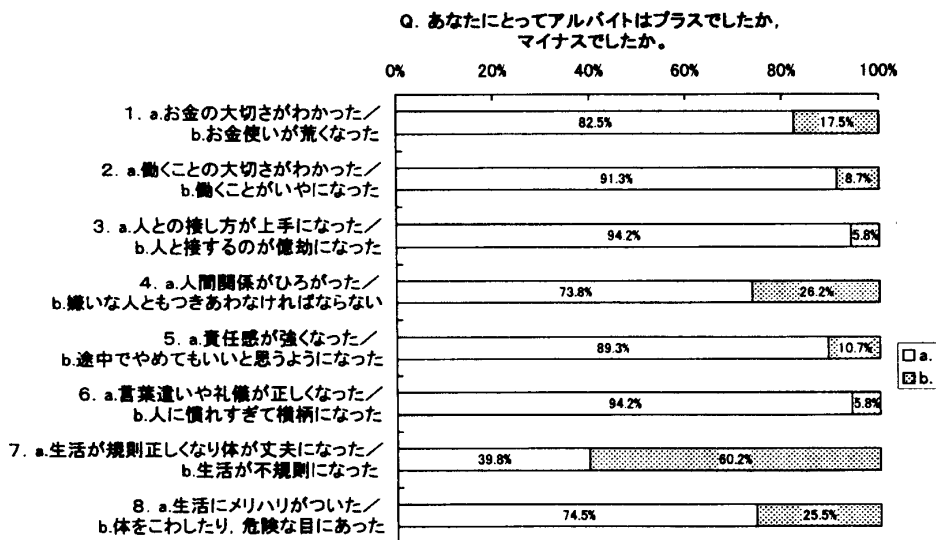


図13-3 アルバイトの功罪

ナスだったかを聞いたところ、アルバイトによってお金や労働の大切さがわかり、人との接し方が上手くなり、責任感が強くなり、礼儀正しくなったと答えている。さらに、人間関係がひろがり、生活にメリハリがついたとし、60.2%が生活の不規則を訴えた以外はアルバイトに有為を感じている(図13-3)。家庭と学校とその人間関係だけの狭いサークルに閉じていたのが、短大入学を機にアルバイトという新しい社会の切り込みが入り、それを肯定的に受け入れている姿が浮かび上がった。

12) 自己評価

自分に対する評価を図14に示す。自分を「1. 正直」「2. 責任感」「3. まじめ」「6. 協調性」「7. 親切」「9. 理解力」があると評価している。その反面、「4. 創造的」「5. 積極性」「10. 個性的」だと考えている者は少ない。この結果は本短大生に対する外部の評価と一致していると思われる。質問項目が同じではないので正確な考察は出来ないが、(2)-6)「親子関係」で明らかにした親が伝

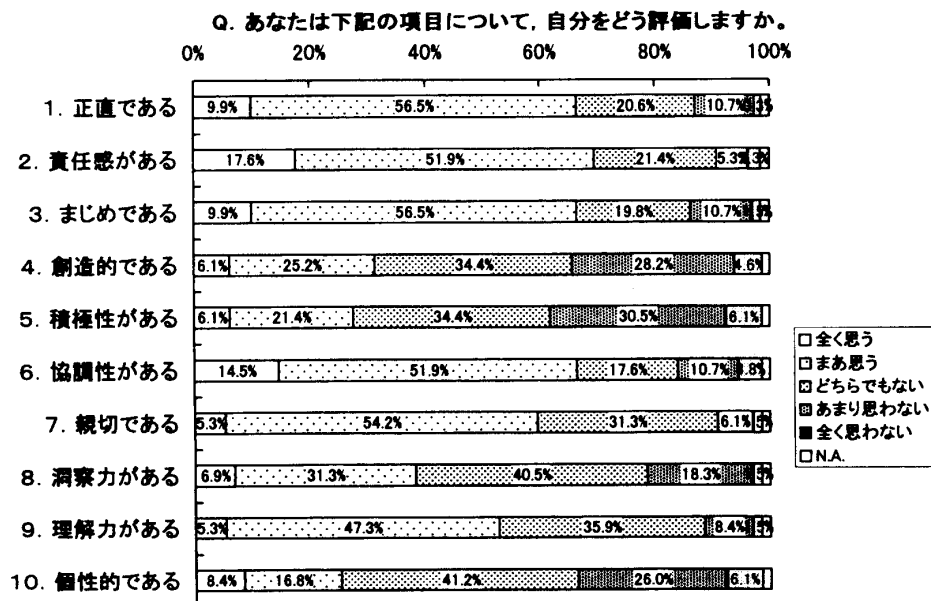


図14 自己評価

える「あるべき人間像」の影響が考えられる。また、本学に学びこのような性向を身につけたのか、もともと持っていた者が本学に入学したのか、日本人全体に見られる一般的傾向なのか、縦断的手法による同一対象者の経時継続調査で変容を確認したい。

13) 自己像とその根拠

自分を大人だと思うか子どもだと思うか、さらにその理由を尋ねた結果を図15-1~15-2に示す。自分を「1. 大人」だと考えている者はわずかに5.3%で、「2. 子ども」(48.1%)「3. どちらでもない」(42.0%)という結果は19~20歳の学生の答えとしては予想外であった。またその根拠は「2. 自分の中の基準から判断して」(55.0%)で、自分はまだ大人ではないということを深く内面化していることがわかる。自らの意思で行動し、その結果を引き受けなくてはならないのが「大人」だとすれば、(2)-(12)「自己評価」で明らかになったように親や社会から与えられた「姿」であることに応え、親の価値に縛られているうちは「大人」ではない。「大人」と「子ども」の分水嶺はどこなのか、何が影響するのか。質問内容を考慮し検討を続けたい項目である。

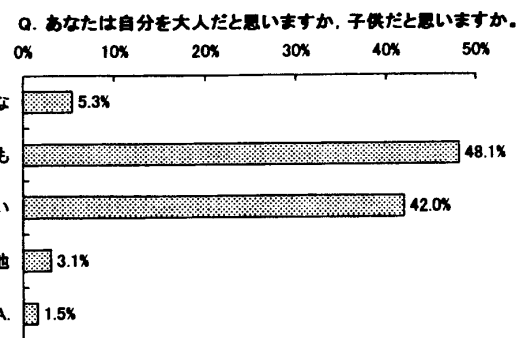


図15-1 自己像

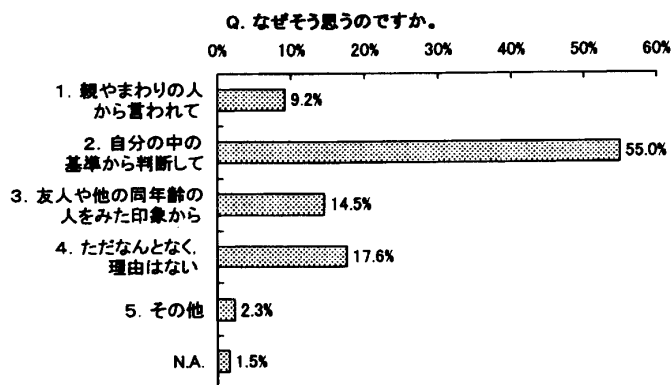


図15-2 自己像根拠

14) 対人関係

友人以外で望ましいと考える人間関係の

複数回答結果は図16の通りである。

「3. どんな人とも仲良く付き合いたい」と考える者が約6割おり、「1. 気の合う人とだけの付き合いで良い」「5. 信頼し合い、悩みを打ち明けられるような深い関係が望ましい」といった浅い関係や、逆に深い関係を望む回答は少なく約2割であった。

「協調性がある」「親切である」と自分を評価し、社会に踏み出す手前の今回の調査対象者が望む人間関係とは、「極端」を嫌う関係であった。

Q. あなたは友人以外の人間関係は、どのような関係が望ましいと思いますか。

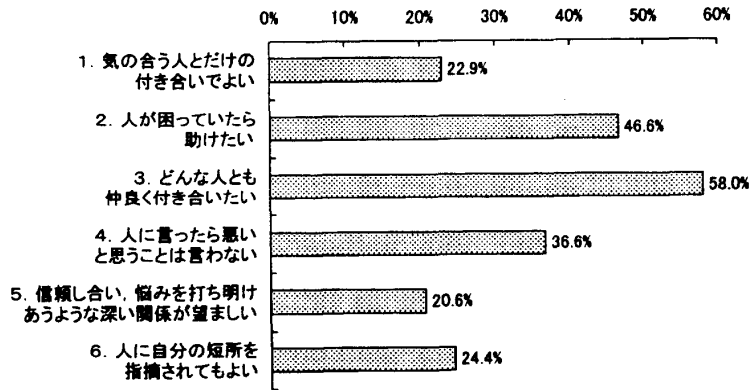


図16 対人関係(複数回答)

(3) 「II. 文化」について

1) 視聴テレビ番組

若者文化を考える上でテレビははずせない。普段見ているテレビ番組の種類を図17に示す。

Q. あなたは普段、どのようなテレビ番組を見ていますか。

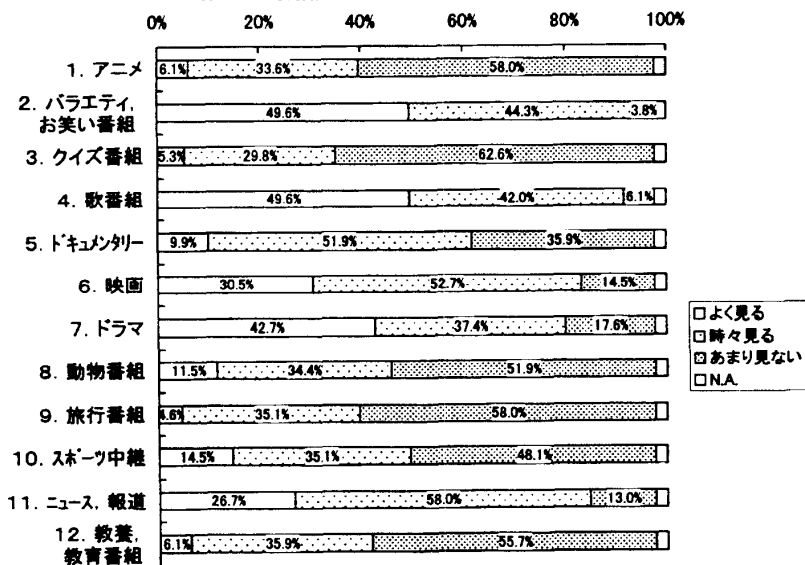


図17 視聴テレビ番組

「2. バラエティ、お笑い番組」「4. 歌番組」「6. 映画」「7. ドラマ」「11. ニュース、報道」を「よく」あるいは「時々」見ている。クロス集計からも、県外出身者は「ドラマ」を、父親の年齢が56～60歳の対象者は「クイズ番組」をよく見ている事がわかった。ニュース番組以外は、ノンフィクションまたはノンフィクションに近いものより、明らかに構成された番組を好んで見る傾向がある。

2) 本

普段読む本の種類についての複数回答結果を図18に示す。「1. 小説」(45.5%)「7. ファッション雑誌」(50.4%)「9. 女性総合雑誌 (non. noなど)」(58.8%)「11. マンガ」(48.1%)は5割近くが読んでいた。とくに日文専攻の対象者では「小説」(73.9%)、「マンガ」(78.3%)が際立っていた。マンガや雑誌は予想通りだったが、若年層に対して持つイメージより小説が読まれていることが明らかになった。しかし、これら以外はほとんど読まれていない。活字離れが言われて久しい。活字離れが言われ始めた頃の「活字」とは専門書や小説を指し、雑誌類は含まれていなかった。現在はさらに進んでファッション写真が載らない雑誌も読まれていないことがわかる。

3) 休日の過ごし方,遊び

休日の過ごし方について(複数回答)は図19に、好きな遊びについての結果は図20に示す。休日の過ごし方は「10. テレビを見る, ラジオ, 音楽を聴く」(50.4%)が最も多く、「4. 買い物をする」(38.2%)「12. ゴロゴロしている」(29.0%)が続く。対象者のような若年層の女性でも中高年齢層の休日行動と大差がないと思われる。ただ、「3. パチンコ, ゲームセンターに行く」(0%)「11. 片付け, 家事をする」(19.8%)の2項目の結果は対象者が女性であることが影響していると考えられる。

また好きな遊びも「2. 2人または複数でできる遊び」(31.3%)「7. 声を出せる遊び(ex. カラオケ)」(29.0%)であった。図19で「休日にゲームセンターに行く」と回答した者が0%だったことにも関連して、14.5%が「遊ばない」と答えた。好きな遊びの種類は他の年齢層でも同様の回答が予想され、休日の過ごし方と同様、ここでも若年層特有の特徴を捉えることができない。

4) ファッション(流行),おしゃれ

嗜好が多様化し、以前の様に1つの服装やスタイルが流行することが少なくなった。若年層においても同様のことが言えるのであろうか。流行の取り入れ方と最も気を使いおしゃれをしている部分を尋ねた結果は図21-1~21-2の通りである。44.3%が「6. 流行に惑わされず自分の好きなものを身に付けている」、28.2%が「1. 雑誌などに載っている流行を取り入れている」と答えている。調査した1999年は、街中で仲間同士が半裸のリゾート服を着るなど、若者の服装感覚が

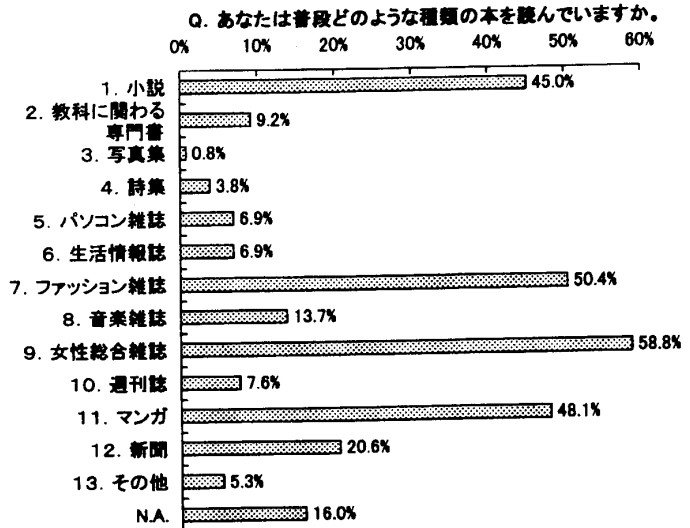


図18 よく読む本の種類(複数回答)

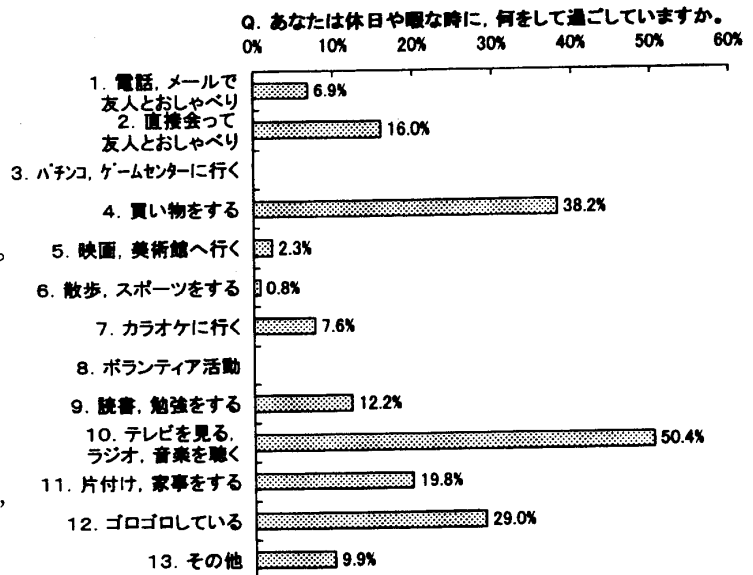


図19 休日の過ごし方(複数回答)

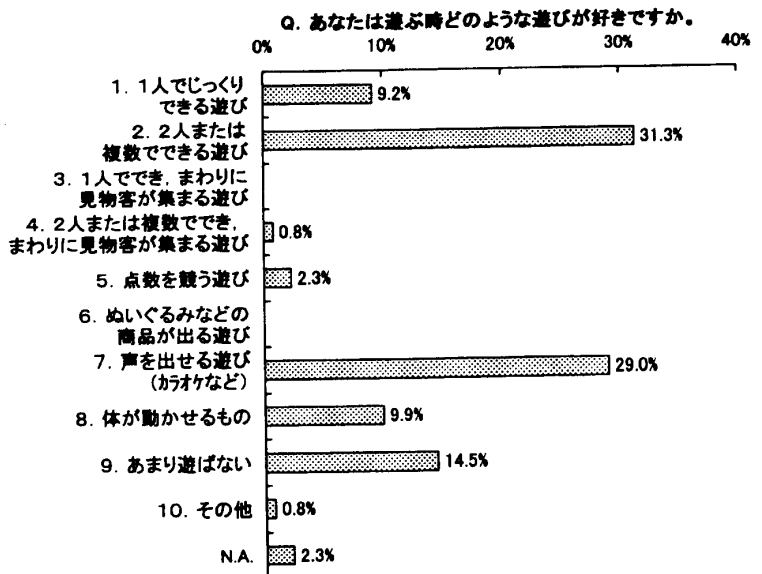


図20 好きな遊び

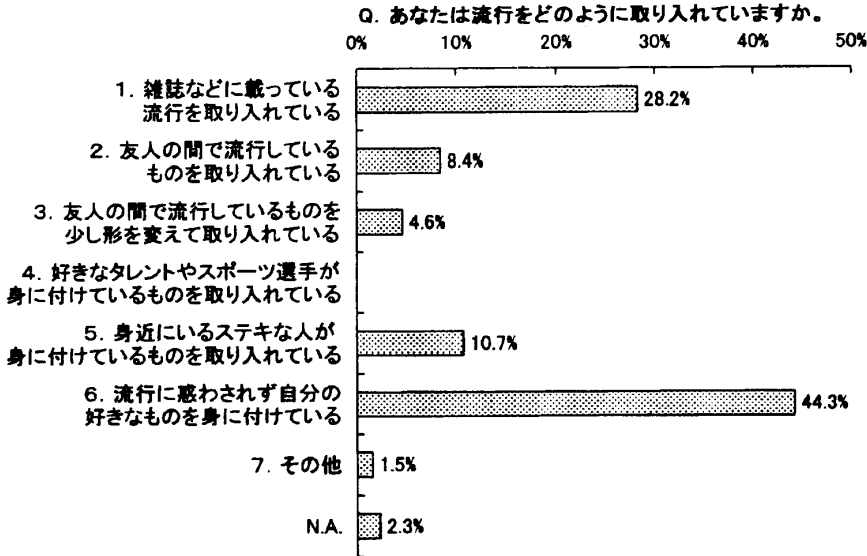


図21-1 ファッション(流行)

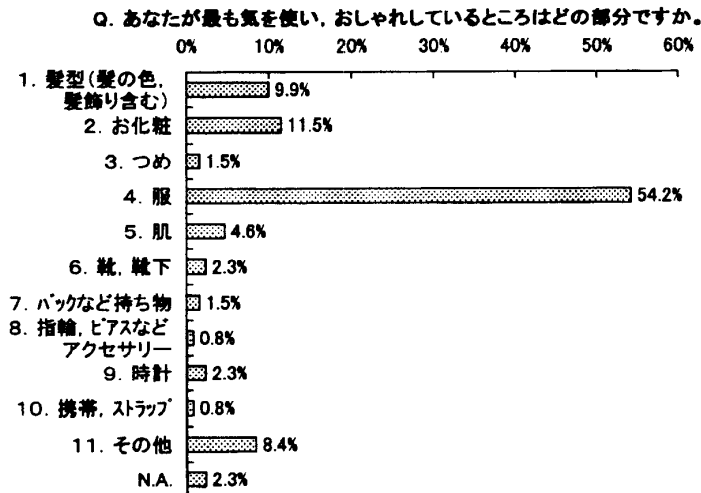


図21-2 おしゃれ

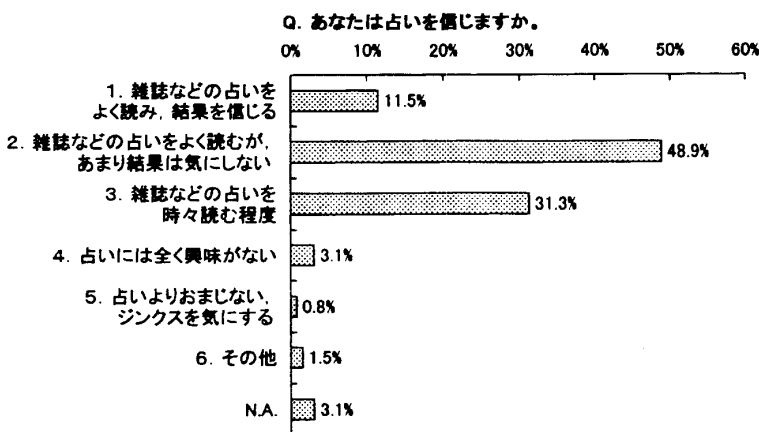


図22 占い

同族至上主義だと注目された。つまり、仲間以外の視線にきわめて無頓着で「服装規範の崩壊」が言われた年であった(1999年8月21日付, 日本経済新聞)。しかし、鹿児島の地域性が影響しているためか、今回の対象者にはこれまでの流行受け入れ行動に反する回答は得られず、友人間だけで模倣し合う傾向は見られなかった。

おしゃれについてもこの年は、衣服より爪や眼鏡など、体の末端にこだわり、小さな差を主張する傾向が都会では見られたが(1999年9月4日付, 日本経済新聞)、本調査では、1位が「服」(54.2%)、2位が「お化粧」(11.5%)で、これまでのおしゃれ概念を覆すものではなかった。

5) 占い

以前、若者向け雑誌で占いを特集した号が完売したことが話題になった。若者にとって占いとは何なのか。占いを信じるかについての結果は図22に示す。「2. 雑誌などの占いをよく読むが、あまり結果は気にしない」(48.9%)「3. 雑誌などの占いを時々読む程度」(31.3%)と読み物として楽しむ程度であることがわかる。占いを特集した雑誌の売れ行きが良いのは占いがトピックスとしての引付け効果があるだけであった。約1割が占いを信じるだけで、占いにとられる割合は低い。

6) 文化動機, 同化意識

本や雑誌, CDを購入する際の動機は図23に示す。また, 服や髪型で気をつけている点から他者への同化意識を探った結果は図24の通りである。購入する動機は, 店頭で気に入って購入する者が最も多く32.8%であった。「3.好きな作家やミュージシャンのものは必ず購入する」(27.5%)「5.テレビやラジオで知り気になって」(23.7%)が続く。これらの結果からは特定の傾向は見出しにくい。(3)-4)「ファッション」で同族至上主義を述べたが, 文化動機にも仲間の影響が見られる先行調査報告がある。しかし, 本調査では友人に勧められることは文化(文化の購入)動機になり得ていない。そして, 対象者が大切にしている友人関係とは同じ趣味や興味でつながる関係ではないことが推察できる。

関連して, 服や化粧をする際の同化意識を尋ねた。(3)-4)「ファッション」で表出した流行の取り入れ方と同様, 「6.自分の気に入ったものを身に付けたい」(45%)が1位で, 自分の感性を重視している(図24)。また, 「4.T.P.O(時, 目的, 場所)に合ったものにしたい」と考えている者も2割以上いる。ここには若者に特有である仲間帰属意識は現れず, 自分の感性と周囲への配慮を大切にした大人が持つ高度な規範意識が伺われる。このことは(2)-13)「自己像」で見られた内面化された「自分は大人ではない」自己像とは乖離している。服や化粧といった身近で個人的な事柄に対する責任や判断を重ねて, 「大人」へ近づいていくのだろうか。また, 若者同士の連帯意識が希薄になっている。このことは大人の価値や商業主義にとられない若者文化といわれる独特の文化の衰退につながるのかもしれない。

7) 好きなスポーツ(見る, する)

見るのが好きなスポーツとするのが好きなスポーツについての結果は図25-1~25-2の通りである。「見るスポーツ」は1位「6.バレーボール」(40.5%), 2位「1.野球」(13.0%), 3位「15.フィギュア

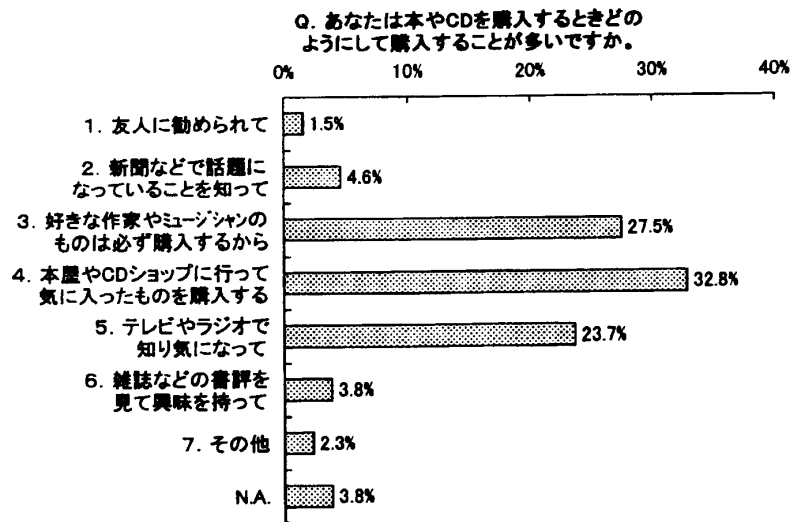


図23 文化購入動機

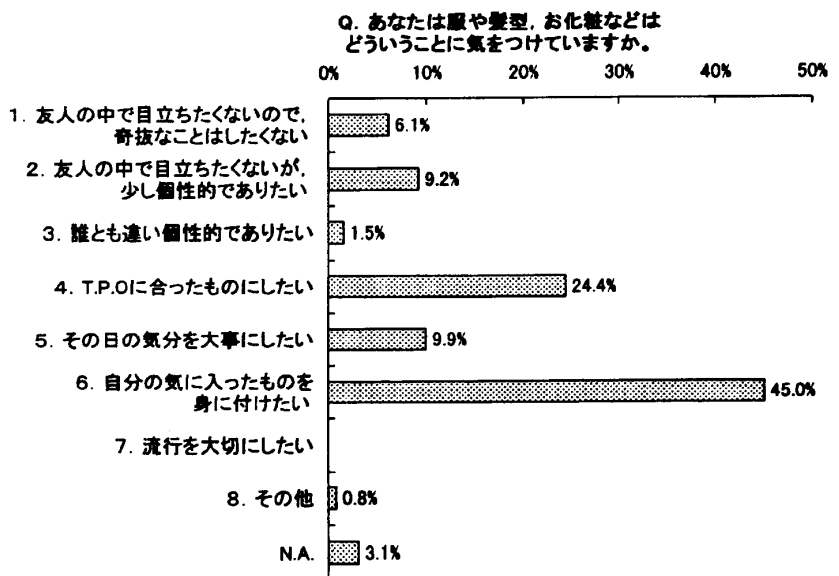


図24 同化意識

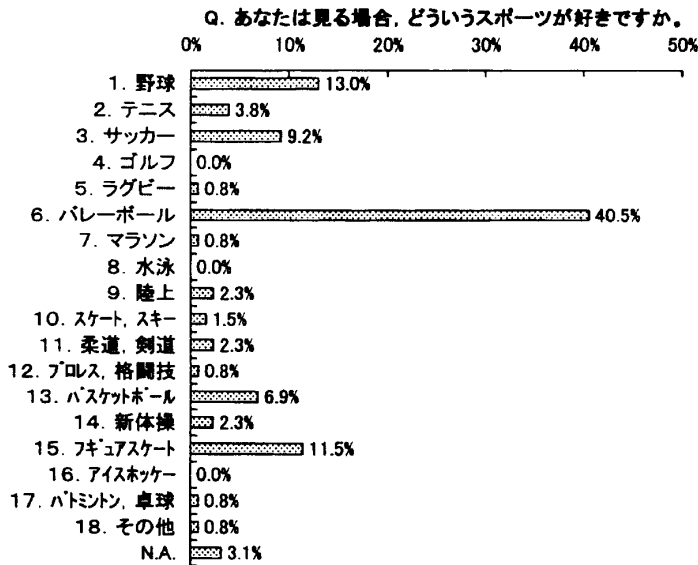


図25-1 好きなスポーツ(見る)

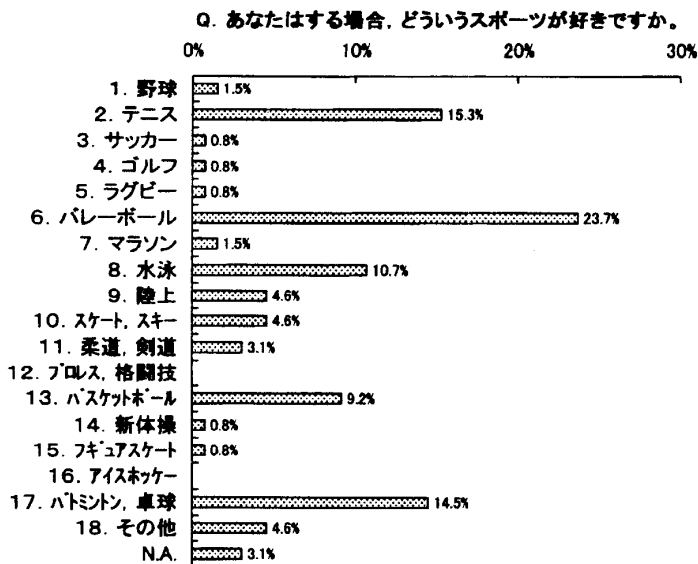


図25-2 好きなスポーツ(する)

スケート」(11.5%)で、「するスポーツ」は1位「6.バレーボール」(23.7%), 2位「2.テニス」(15.3%), 3位「17.バドミントン、卓球」(14.5%), 4位「8.水泳」(10.7%)であった。バレーボール以外は好きなスポーツと実際に「するスポーツ」は異なっていた。「見るスポーツ」として一般にも人気のあるスポーツが本調査でも結果として見られた。また、学校教育で経験があり、施設が身近で、複人数競技、順位主義でないスポーツが「するスポーツ」として好まれている。

(4)「Ⅲ.消費」について

1) 所有物,自分で購入した所有物

所有物と其中で自分の小遣いやアルバイト代で購入した物を図26-1~26-2に示す。専門学校に通っている者は1割に至らず、車の所有も13%であった。バイクとTVゲーム機の所有は3割、自転車とパソコン、旅行、運転免許は6~7割が所有していた。その他の項目は8割以上が所有していた。その中で自分で購入した主なものは、「5.服」(89.3%)「6.靴、バック」(80.9%)「8.化粧品」(74.8%)「9.アクセサリ」(59.5%)「10.下着」(40.5%)であった。身につける物

から経済的自立が始まっている。身につける物のお仕着せを嫌い、自分を表現するために自分のお金で好きなものを購入するのは精神的自立の第一歩であるかも知れない。また、趣味や目的のために貯蓄して高額商品を消費するより、欲しい物を即時に購入する傾向が見られる。

2) 購入の判断基準

ものを購入するときに気にする点を複数で回答した結果を図27に示す。(3)-4)「ファッション」で流行の取り入れ方、(3)-6)「同化意識」で服装などの表現方法で、自分の感性を重視した回答がされたが、実際の購入判断では「2.価格」(77.9%)と「1.色、デザイン」(71.0%)に集中し、「9.自分の感性」は16.8%にとどまった。自由に使えるお金が少ない場合、慎重に吟味し、価格や機能性を優先させる傾向がある。また、団塊ジュニアは偏差値世代と呼ばれ、堅実な消費姿勢が特徴とされている。今回の対象者は団塊ジュニアより下の世代だが、同様の傾向が見られる。今後消費

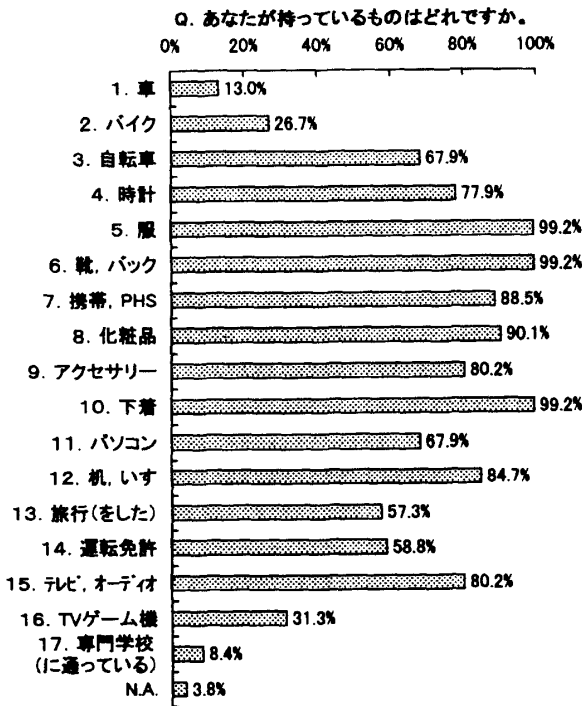


図26-1 所有物(複数回答)

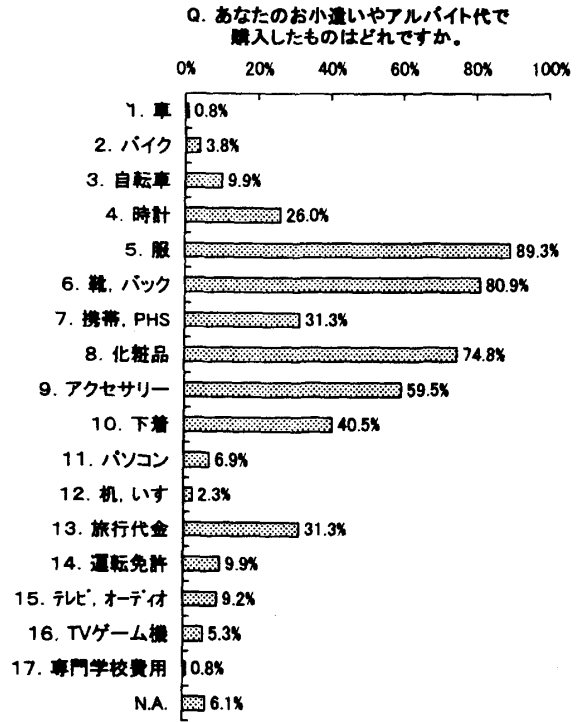


図26-2 自分で購入した所有物(複数回答)

経験を積むことで判断基準に自由度が増すことが予想できるが、大きな変化は見られないであろう。

3) 被服行動

洋服を購入する際の意識を尋ねた結果は図28に示す。先行研究⁶⁾から設定した質問項目を分類すると以下の通りである。項目1.~2.は流行性, 3.~4.は経済性, 5.~6.は社会規範, 7.~8.は機能性, 9.~12.は自己顕示または他者承認期待である。「10.友人と同じタイプの服を着ていると安心する」が「あまり思わない」「思わない」合わせて5割近くになったが、残りの項目は全て「そう思う」「時々思う」合わせて6割から9割になった。服に関しては流行, 経済性, 社会規範, 機能性のいずれにも突出した若者特有の傾向は認められない。ただ, 項目10に関しては個性の発現と見るか, 仲間意識の希薄さと見るか判断が分かれる。

今回, 多変量解析による背景要因の抽出や対象者の分類を試みるために, この質問項目を含め7項目で5段階評定による設問を立てた。多方面から解析を試みたがいずれも結果の寄与率が低く再現可能性が期待できなかった。今

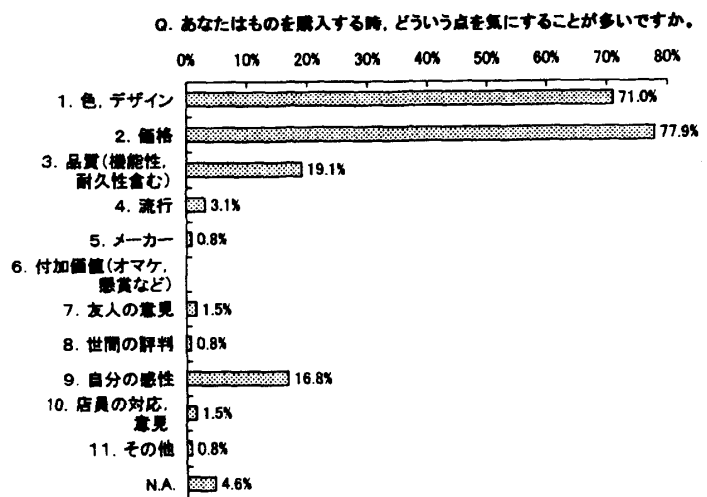


図27 購入の判断基準

後の調査では多変量解析を行なうためにさらにカテゴリー内容を検討する必要性が明らかになった。

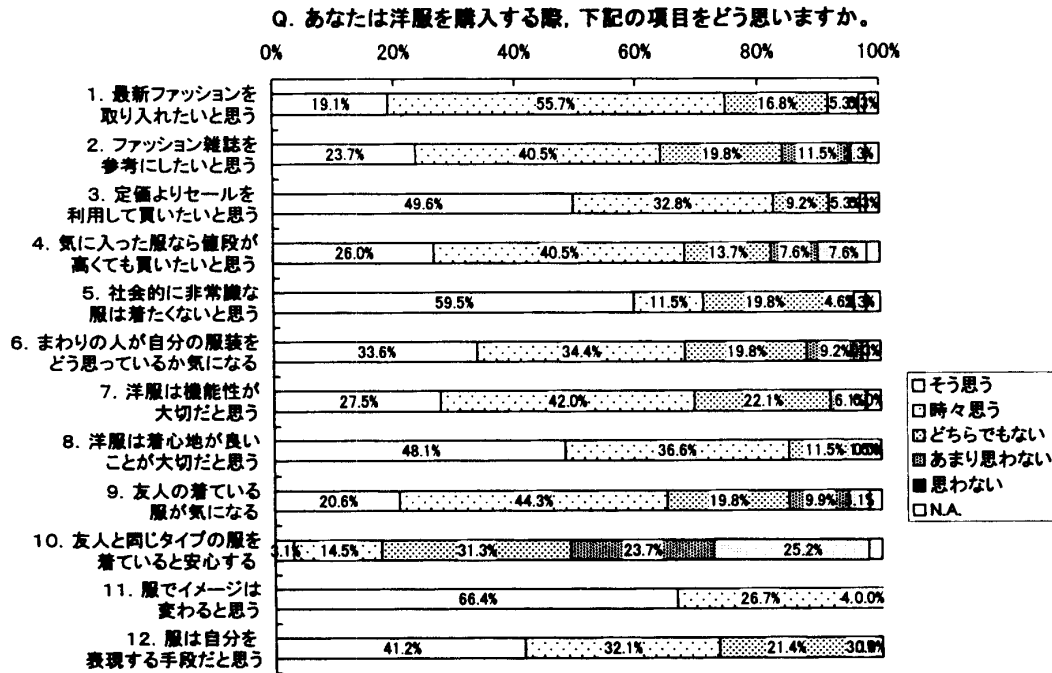


図28 被服行動

4) 労働観と就職

卒業後働く理由と就職に対する意識と行動を質問した結果は図 29-1～29-2 の通りである。「1. 日々の生きる糧（生活費）を得るため」が最も多く50.4%である。次は「7. 夢や自己実現のため」で

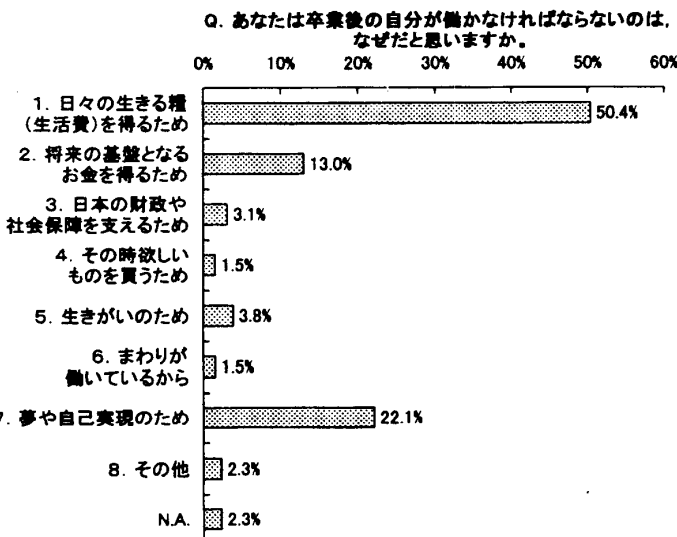


図29-1 労働観

22.1%、「2. 将来の基盤となるお金を得るため」が13.0%と続く。最近、学校から会社への道を忌避し定職に就かない20代の若者が増えた。彼らは経済的に困った経験が無いため、経済的豊かさより社会に役立つやりがいや自分らしい着実さを求めていると言われている。彼らとは異なり本調査の対象者はこれまでの素朴な労働観を保っている。

また、就きたい職種を決めている者は54.2%で、20歳で就職するのは早いと思わない者が64.1%であった。しかし、就職に対する不安があるのは94.7%とほぼ全員で

あるのに、就職対策は74.8%がまだなにもしていないと答えた。就職はしなければならないと自覚しているものの不安が先に立ち、具体的な動きに結びついていない対象者の意識と行動が明らかになった。

5) 貯蓄

仮定として臨時ボーナスを支給されたらどうするかを問い、貯蓄に対する意識を探った結果は図30の通りである。8割近くが「3. 半分ほど貯金して、のこりは欲しかったものの購入に使う」と回答している。貯蓄やお金の使い方に計画性と堅実さを感じさせる傾向を捉えることができた。

6) 金銭感覚

金銭感覚を明らかにした結果は図31に示す。質問項目は、勤儉力行、拝金主義、精神主義、権力主義、記号的意味を中心に作成した。勤労力行を表す項目「1. 将来に備えてできるだけ貯金すべきだ」「2. 人は一生懸命働いてお金を得るべきだ」は「全く思う」「まあ思う」を合わせて7割以上を占めた。

拝金主義を表す項目「3. お金がなければ愛も幸せも手に入らない」「4. お金持ちは尊敬される」は「全く思う」と答えた者は少ないが、「全く思わない」と答えた者も10.7%, 22.1%である。

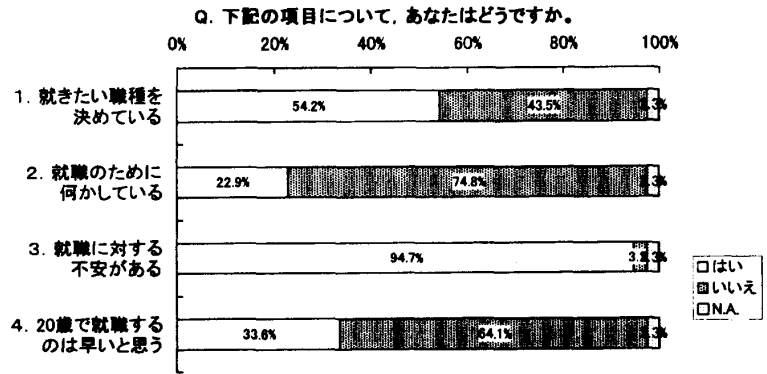


図29-2 就職

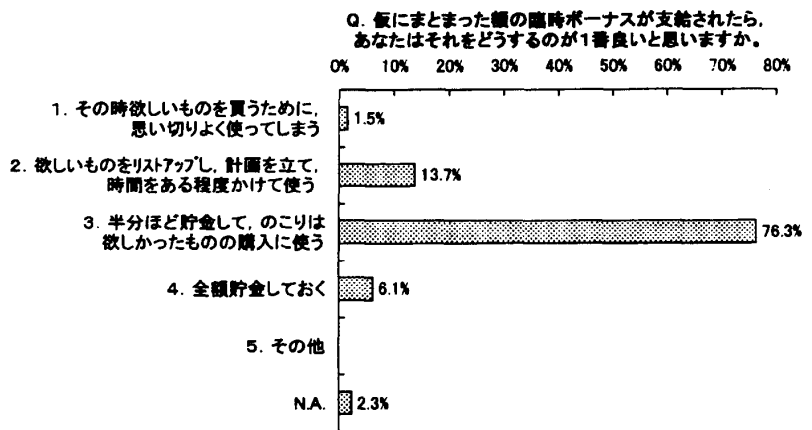


図30 貯蓄

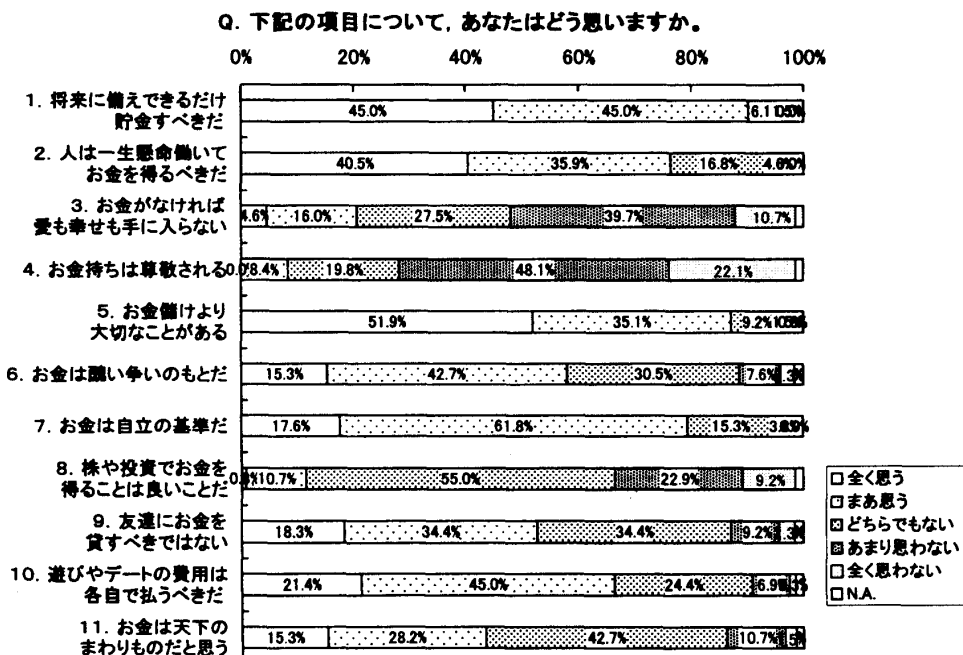


図31 金銭感覚

拝金主義を完全に否定している結果は得られなかった。「5. お金より大切なことがある」に「全くそう思う」「まあそう思う」者が9割近くを占め、精神主義傾向が見られる。近年は株や投資に関心が集まっているが、「8. 株や投資でお金を得ることは良いことだ」に「どちらでもない」としている者が5割以上を占め、一般社会の関心が若年層に浸透しているわけではないことがわかる。友人にお金を貸すべきではない、また費用は割り勘にすべきだと考える者も6割近くを占める。(3)-5)「貯蓄」の結果と合わせて、調査対象者の堅実さが伺える。これが若年層における一般的特徴なのか、今回の対象者のみの特徴なのか、対象者の年齢、性別、地域を広げて今後の調査で問いたい。

7) クレジットカード

クレジットカードに対する意識と実態を尋ねた結果は図32の通りである。6割近くが「4. 後の引き落とし金額が知らない間に大きくなりそうで怖いので使いたくない」と答え、27.5%は「3. 買い物の額に応じて上手に利用すればよい」としている。また、実際に利用している者はいない。怖いという回答はメディア報道の影響が考えられる。客観的な判断が下せる意思形成の前に、カード利用に対して善悪を植え付けられた姿が浮かび上がっている。クレジットカード=悪という印象から一歩抜け出し、カード社会の現代において賢い消費者になるための有効な利用法について学習する機会も必要なのではないか。

今回、若年層の現況を広く把握したいために質問項目が多岐にわたり、質問内容が孤立してしまった。今後、仮説を立て重点項目を絞り、項目間の相関を良好にすることでさらに若年層の実像を明らかにしたい。質問方法もまず意識や実態を尋ね、さらにその根拠を明らかにする形式を多用する方がより深く対象者の内面を探ることができるのではないかと考える。

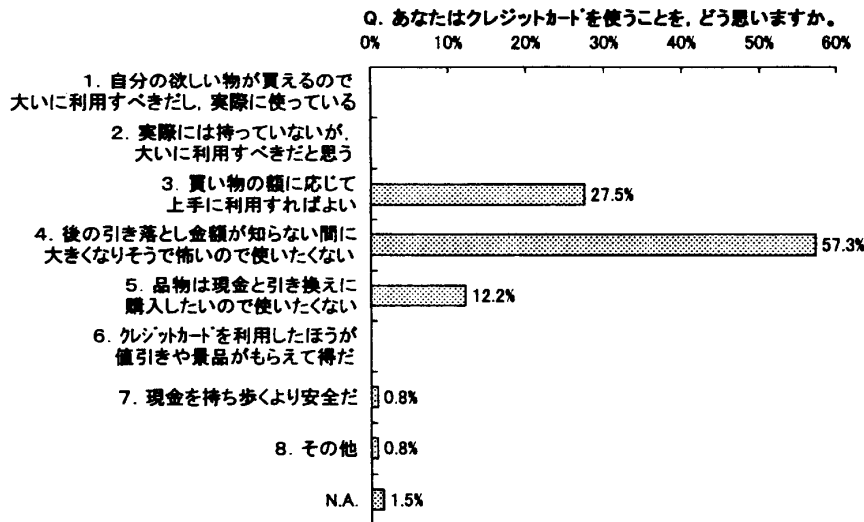


図32 クレジットカード

4. 要約

本学学生の意識及び実態の把握と、今後行なう予定である鹿児島における若年層の実態調査の質問項目を検討するために行なった今回のプレ調査から、次の点が示唆された。

(1) 今回の調査対象者は、現在の生活に満足し、良好な関係にある家族や友人との静かな交流を

ベースとした生活スタイルを保っている。

- (2) 半面、親が与える規範を深く内面化しているため親から精神的に独立できず、自分は大人でないと自己認知している。しかし、アルバイトなどによって親子関係以外の社会性が開かれつつある。
- (3) 調査対象者間では文化に対する共有意識は薄く、若者特有のサブカルチャーで繋がる仲間意識は見出せない。
- (4) 消費行動、労働観、貯蓄のいずれにも堅実さが認められる。
- (5) 今後の調査では意識と行動の根拠や理由を問う項目の設定と、多岐にわたる項目内容を貫く統一テーマが必要である。また、調査に横断的手法と縦断的手法を用い、その比較から対象者の変容と地域や時代背景を探ることは欠かせない。

文献

- 1) 全国大学生生活協同組合連合会：第32回学生の消費生活に関する実態調査結果，（1996）
- 2) 牧野唯，今井範子：居住者の生活行動からみた生活スタイルと住環境整備意識，日本家政学会誌，Vol. 50, No. 11（1999）
- 3) NHK放送文化研究所編：『現代日本人の意識構造（第五版）』，日本放送出版協会，東京（2000）
- 4) 千石保，飯長喜一郎：『日本の小学生－国際比較で見る－（第二版）』，日本放送出版協会，東京（1980）
- 5) 千石保：『日本の高校生－国際比較で見る』，日本放送出版協会，東京（1998）
- 6) 山口恵子，藤井一枝：被服行動に関する意識と地域差の検討，繊維製品消費科学，Vol. 40, No. 8（1999）